

第 62 回建築士会全国大会「北海道大会」参加報告

香川 博

1 記念講演

演題「Between Nature and Architecture」として、(株)藤本壮介建築設計事務所代表の藤本壮介氏による記念講演が行われました。

藤本氏は、1971年に北海道で生まれ、旭川東高校、東京大学工学部建築学科を卒業後、2000年に設計事務所を設立。

今までに JIA 新人賞、日本建築大賞の受賞や様々な設計競技の最優秀賞を受賞しています。見た目が奇抜な建築が多く、毛綱氏の建築を彷彿とさせますが、藤本氏が建築を志す切っ掛けとなったアントニオ・ガウディの影響を受けている印象を持ちました。実際に、実物を見てみたいとも思わせる力強い建物でもありました。



2 大会式典

江差追分によるオープニングセレモニーで大会式典が始まりました。その後、久島北海道建築士会副会長の開会宣言、高野北海道建築士会会長の挨拶と続き、国家斉唱、物故者追悼、主催者挨拶、来賓祝辞がありました。

表彰式は、連合会長賞、伝統的技能者表彰、連合会賞表彰、地域実践活動表彰とそれぞれの表彰が行われました。

大会アピールの後、大会旗が次期開催地であります広島建築士会に引き継ぎ、無事終了しました。

開催者側の発表では、2,880名の参加者だったそうです。



防災まちづくりセッション

テーマ「事前防災活動指針や風水害復旧マニュアルのRE+」

報告者：金子 ゆかり

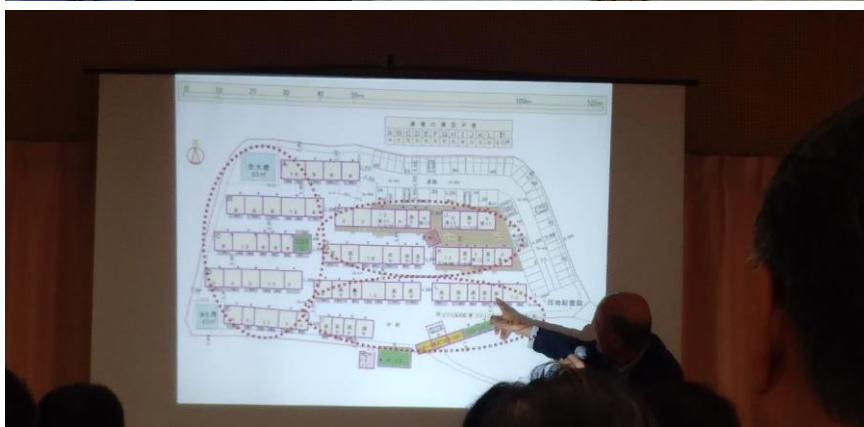
昨今は色々な種類の災害について危機感を持つようになりました。釧路では「地震と津波」の心配する事が重要だったのは過去の話で、風水害についても考えるべきだと感じています。

分科会では、「起こってしまってから考える」のでは無く「起こる前に準備しておく」という事について、深く考えさせられる事例発表が数多くありました。

例えば徳島県建築士会の事例報告では、行政から委託を受け、建築士会が仮設住宅を予め選定した建設地に配置等計画を行っておく。和歌山県建築士会は、長期に渡る利用を考慮し、木造の仮設住宅を計画。設計部会と供給部会に分けて準備を行っているそうです。

災害が起こってからでは混乱する事柄を、自治体と建築士会などが連携して備えを行っている事に、非常に大きな驚きを覚えました。

やはり大きな災害を経験した地域だからこそ、経験を活かそうとしているのだと思うと同時に、自分の町でも千島海溝沖地震等への備えを万全にすべきであり、それについて建築士会の果たすべき役割は大きいのではないかと考えさせられました。



景観・街中(空き家)まちづくりセッション

テーマ「空き家等の適正管理と利活用による景観の向上」

報告者：鈴木 要

近年の人口減少や住宅の老朽化、社会的ニーズの変化により、利活用されない空き家が増加しており、それが適切に管理されず放置されています。今大会では、空き家の放置が周辺の環境や景観に悪影響を与えている現状を踏まえ、「どうすれば適切な管理が維持できるのか。」「どうすれば空き家を如何に早く流通させることができるのか」また、「除却後の空き地の景観をどのように、誘導するのか」について、建築士のまちづくりとして議論致しました。今大会では、3つの事例報告が発表され議論されました。

■事例報告 1 「しりべし空き家BANK のしくみと活動」

報告者：北海道建築士後志支部 榊 政信 氏

<http://park21.wakwak.com/~hkss/akiyabank.html>

■事例報告 2 「医学を基礎としたまちづくりにおける空き家利活用」

報告者：奈良県建築士会橿原支部 佐藤 智之氏・徳本 豊氏

■事例報告 3 「大分県における空き家の取り組み」

さいきまちづくりユニット DOCRE・国東支部 鶴川商店街

報告者：大分県建築士会地域ブロックリーダー 渡邊 賢一氏

https://inaka.arukikata.com/oita/saiki/blog/oita_saiki_04/2016/12/docre.html



女性委員会セッション

テーマ「和の空間の魅力を探る・・・ふたたび
「魅力ある和の空間ガイドブック WEB 版」の活用」

報告者：須藤 志津子

今回のセッションでは、以前に作成した「魅力ある和の空間」ガイドブックの内容について4県のパネリストにより詳しい紹介が有りました。

*北海道建築士会は「北海道の自然に呼応する日本家屋」

岩崎さんから、精華亭、旧相馬邸についてスライドを映しながら紹介されました。

*青森建築士会は「みちのくの和の空間を読み解く女性の視点」

近藤さんからは、田中家住宅、新むつ旅館（元新陸奥楼）について紹介されました。

*福岡県建築士会は「華やかな和の空間の魅力」

近藤さんからは、旧伊藤伝右衛門邸、旧柳川藩主立花邸について紹介されました。

*広島県建築士会は「多岐にわたる和の表現」

野口さんからは、太田家住宅、耕三寺湖豊閣について紹介されました。

各県の気候風土又は時代により様々な様式及び建築材料が使われており、又建築主のこだわりが反映されている建築物だと感じました。又参加者は全国大会の為、多くの都府県からいらしており、特に次回の全国大会開催地の広島県からは多くの会員が参加されておりました。この「魅力ある和の空間」のガイドブックは日本建築士会連合会のホームページの女性委員会のページに掲載されている為、誰でも見ることが出来ますので、是非釧路支部の会員の皆さんに見て頂きたいと思いました。



歴史まちづくりセッション/第7回ヘリテージマネージャー大会

テーマ「歴史的建物を使い続ける～持続する地域・まちづくり」

報告者：楠 廣文

■ 歴史まちづくりセッション…

私は建築士会には入会して30年以上経過しているのですが、建築士会全国大会には齢59歳にして初めての参加です。右も左も分からないので、全て先輩諸氏にお任せしたもので、至れり尽くせり。まるで修学旅行か観光ツアーにでも出掛ける気分でした。

そんな不謹慎な気持ちなものですから、参加する分科会が「歴史まちづくりセッション」と知ったのは前日でした。何の心構えも準備もなく参加してしまいましたが、建築史とか歴史的建造物等は、割と好きなテーマで、興味を持って登壇者のお話に耳を傾けることができました。

■ 第7回ヘリテージマネージャー大会…

今回はヘリテージマネージャー大会を兼ねての分科会でした。

テーマは、「歴史的建物を使い続ける～持続する地域・まちづくり～」

本州に比べて歴史の浅い北海道でも、文化遺産とも云える多くの歴史的建造物があることを改めて知りました。

事例として発表されたのは下記の4題。

- ① (道北)「国境のまち 稚内の歴史的建築物の保存とまちづくりについて」
- ② (道東)「中標津・伝成館とまちづくりについて」
- ③ (道東)「帯広・重文指定 旧双葉幼稚園園舎とまちづくりについて」
- ④ (道南)「函館西部地区 暮らしの中の歴史的建築物」

しかしながら、恥ずかしながら…と云いますか、事例①はもちろん、我が道東に事例②③のような取り組みがあった事は全く知りませんでした。

□事例①は、昭和初期にロシア艦船の動きを監視するために、旧帝国海軍が設置した通信施設3棟の保存を目的とした取り組みです。

平成14年に稚内市が建築学会に歴史的建造物の調査を依頼した結果から、ほとんど廃墟と化した通信施設3棟でしたが国境のまち稚内市としての歴史的背景を物語る施設として、保存運動の高まりがあったそうです。歴史的建築物の修復・保全において最大の問題は財源問題ですが、この事例では、太陽財団からの民間資金を活用できたとの事です。

また、修復には地元建設業界の絶大な協力があったそうです。

今後の維持保全等についての課題は残っていますが、その資金はクラウドファンディング

の活用を検討されています。

戦争の惨禍を知る祖父母や両親の世代がいなくなることが時間の問題となっている昨今。戦争遺構を残すこの取り組みが、維持・継続されるよう祈ってやみません。

- 事例②は私の距離感では釧路市のお隣？中標津町の伝成館保存の取り組みです。伝成館は旧農事試験場として北海道が昭和初期に設置した施設です。この保存運動が一応の結実に至るプロセスがドラマチックです。

保存運動は、まず所有者の同意をえることからスタートすると思いますが、所有者は北海道です。お役所相手では、最初に担当部局が大きな壁となります。通常、まずは保存の目的やら、資金問題、安全問題などはどうするのか？などと、現実を突き付けて、保存にかける覚悟を試しにかかります。簡単にはOKは出てこない…いや、出せないシステムなのです。

これを一気に乗り越えたのが、関係者の強力なネットワークと迅速なフットワーク。いきなり、高橋はるみ知事（当時）への直談判。

おそらく、即断即決とはいかなかったと思います。一応は担当部局に可能かどうか問合せての結論でしょうが、どこの組織でも、最高責任者の判断・決定は絶対です。この時点で、保存運動の成否はほぼ確定したと云って良いでしょう。

今後、この保存運動が維持・継続され、数年後に成功事例として広く認知されるものになれば、「中標津町伝成館物語」としてドラマ化できるかもしれません。

- 事例③の帯広市旧双葉幼稚園の取り組みです。保存運動は、平成25年、第100回目の卒園式をもって閉園されることが決められた時期から、卒園生を中心にスタートしたそうです。

園舎創建は大正11年11月。英国聖公会（キリスト教系）により建築されたもの。中心に丸屋根八角ドームをいただいた梅鉢型幼稚園。西歐的で個性的かつ斬新なデザイン。平成29年7月31日に国指定の重要文化財となりました。結構昔のことと思いきや、意外にも最近のお話です。

この重要文化財指定を受けるにあたって最大の問題は、所有者である聖公会北海道教区は、今後、園舎の保存・運営に直接関与できないことを理解してもらうことでした。

ところが、関係者の不安をよそに…所有者側も園舎を保存したいという思いを共有していたことから、さほどの問題にならずに了承されたそうです。

「案ずるより産むがやすし。」ですね。

このような歴史的建築物を後世に伝えるためには、所有者や地域の理解と協力が欠かせないことはもちろんですが、保存運動の成否のカギは、関係者の熱意と努力なのだな…と事例発表を聞きながら感じました。

□事例④です。函館西部地区は、出張等で3回ほど函館市を訪れた事もあり、歴史的建築物をいくつか見学したので、その存在は知っていました。

とかく「歴史的建築物」といいますと、一般的にそれ自体が「大規模」だったり、「豪華絢爛」だったり…。或いは所有者や設計者が全国的に有名だったりするなど、「保存」「保護」への気運が自然に醸成される「地域のシンボル・ランドマーク的存在」と思われがちです。

今回は函館西部地区にある、「暮らしの中の歴史的建築物」ということで、まちなかにある…古びた店舗や民家に歴史的価値を見出しながら、「使い続ける道」を模索する取り組みです。

いま、個人が所有する中小規模の建築物は、その時代を反映した歴史的な価値を持つものでも、社会問題となっている「空き家問題」同様、適切な維持保全が為されずに放置され、老朽化危険家屋になってしまうものも少なくありません。

我々歴史的建築物と云えばそのままの形を「いかに保存するか」ということに腐心しがちですが、「いかに使い続けるか」という視点も必要です。このような「使い続ける」取り組みは、「スクラップアンドビルド」「使い捨て文化」の中ですべての事象を「経済性」「効率性」という視点で割り切ることに慣れ過ぎた昭和の高度経済成長期を知る世代に対する警鐘にも聞こえました。

□思いのほか、長々と綴らせて頂きましたが…。この度は、このような機会を頂き、地元の釧路支部の先輩諸氏並びに建築士会全国大会を運営・成功に導かれた建築士仲間の皆さんに心から感謝致します。ありがとうございました。

青年委員会実地研修会&セッション

地域実践活動発表会

青年委員会
◎委員長 清水 洋平
前田 繁
橋本 幸司
角田 晴信

期日 2019年9月20日～9月22日（本大会 9月21日(土)）

大会に先立ち、9月20日青年委員会は、移動日を利用して青年委員会実地研修を行った。
視察先を、五稜郭公園・元町地区で行い五稜郭公園では函館奉行所を視察し、伝統建築について学びまた、歴史的建築物の復元という北海道では函館ならではの公共建築物を見学しながら委員内でその場で意見交換を行った。

また、元町地区に移動し、旧イギリス領事館等歴史的建築物の利活用方法について視察した。



次の日9月21日開催された第62回 建築士会全国大会「北海道大会」本大会の青年委員会セッション(地域実践活動発表会)、記念講演、大会式典に参加した。



青年委員会セッションについては8ブロックの発表がなされ、WEB投票がされた。結果は以下の通り。

奨励賞

- ・ 関東甲信越ブロック：埼玉県
『くむんだーで「やま」と「まち」をつなぐんだー』
- ・ 東海北陸ブロック：静岡県
『建築フェスタ』
- ・ 近畿ブロック：京都府
『KAR ～Kyoto Archi Rally～』
- ・ 北海道ブロック
『青年建築士の集い in 厚真町』
- ・ 東北ブロック：岩手県
『大澤家住宅保存活用に向けた調査事業』

連合青年委員会賞☆

- 近畿ブロック：京都府
『KAR ～Kyoto Archi Rally～』

優秀賞

- 九州ブロック：長崎県
『平和と歴史を語り継ぐまち』

最優秀賞

- 中四国ブロック：高知県
『土佐幕末の芝居絵屏風・絵金文化の継承』

各ブロックとも非常に地域に根差した活動をしており、また補助金等多額予算をかけた行っている地区が多くみられた。

着目は各地域によりさまざまで、これからの建築業界に向けた一般参加型事業や、防災・環境・福祉など地域コミュニティを考える事業、建築士のスキルアップに繋がる事業など、非常に参考となることが多かった。

